

第43回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

クラブフット

加古川市立浜の宮中学校 3年 今津 柊馬

僕は右足首がねじれて生まれてきました。原因は色々言われているけれど、確かなことは分かっていないそうです。先天性内反足という疾患で、奇形です。千人に一人、他の人と形の違う人間に生まれました。

僕は生後5日ですま先から太ももまでギブスを巻き、生後三十日でアキレス腱を切って繋げる手術をしました。そこからまた、つかまり立ちをするまでギブスを巻き続け、歩き出したら装具をつけます。生まれてすぐ異変に気づいてくれた先生、日本屈指の小児整形の先生、毎週病院に通ってくれた両親。いろいろな人の助けがあったことで、なんとか足の裏が地面につくところまで治療が進み、自分の足で問題なく立てる、歩ける、走れるようになりました。

でも、成長するにつれて、右足と左足の大きさや太さ、長さの差が大きくなり、見た目には左右の足が違うことがみんなに分かってしまうようになりました。だから、僕は夏の体操服が嫌いでした。僕の足がみんなの目に入り、からかわれると思ったからです。でも、学校みんなは僕の足の事を誰一人何も言いませんでした。

「誰も気づいていないのかもしれない」

「気づいていても言わなかったのかもしれない」

「気づいているのなら、いつそ言われたほうが説明できるのに」

そう思いながら夏の体育が過ぎていきました。

中学一年生からテニス部に所属し、運動量も日増しに増え、右足にはかなり負担がかかるようになりました。年に一回の経過観察だったはずが、数か月に一度県立こども病院へ行く機会が増えていきました。小さい頃からずっと通っている病院です。小さいころから何となくいつも通っていた病院ですが、僕が大きくなり、周りの患者さんに目を向けるようになりました。

そこには僕と同じ足を持つ子が他にもいます。それよりももっと、見た目に分かる症状の重い子どももたくさんいました。その子たちは僕のように隠すこともできない。それどころか、走ることも歩くこともできない子たちと一緒に順番を待っていると、自分がなんだか恥ずかしく、情けなくなってきました。幸いに

も痛めながらも運動ができる体に生まれてきたのに、人の目を気にして隠そうとしていました。学校みんなは僕の足を何も言わないのに、僕が自分自身で自分の足やみんなと違う事に偏見を持っていたことに気づきました。

この足で生まれた自分を認めて、自分らしく生きていく事で、他人の違いも認め、尊重することで、差別や偏見がなくなるかもしれません。生まれ持ったものは個性であり、かけがえのない自分自身であること。そう思うようになってから、僕の足はマイナスでもなんでもなく、千人に一人に与えられたプレゼントだと思えるようになりました。ツタンカーメンも内反足です。メジャーリーガーの一人も内反足です。この僕にも、もっともっと、何かできるんじゃないか。不安の中でギブスを巻いている子やその家族に、

「大丈夫！歩けるよ！スポーツもできるようになるよ！」

と希望を与えられたら、僕の足は彼らにとって、力強い勇気を作れるかもしれません。

今では、足の太さやサイズが違う事を隠すこともなく、冗談や強みにさえしてしまえるようになりました。そして、僕も同じように人の見た目やアイデンティティで決めつけるのではなく、もっと相手のことを知りたい、自分と違う人の事を教えてもらいたいと思うようになりました。

人と違うことは恥ずかしい事ではなく、人を認められないことこそ恥ずべきことだと思います。病気だけではありません。生まれた国が違う事、考え方が違う事、信じる神様が違う事、肌の色や髪の色、鼻の形、みんなそれぞれ大切に、かけがえのない自分で生きていくこと、そして他人を尊重することで、差別のない、温かい人間関係が生まれるのだと僕は思います。